My Days in NIUE Island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3794

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

南海遊録―ポリネシア ニウエ島フィールドノート―（2）＊

My Days in NIUE Island

馬　場　優　子

1994 年 10 月 20 日（木）

内政自治権を獲得してニュージーランドの保護領から自由連合国となって以来 20 年、この日は独立記念日もしくは憲法記念日として全島規模で盛大に祝われる祝日である。商店、学校ともにすべて休業し、観光担当部署以外のすべての官公署は業務を停止している。儀礼の多い島生活の中でも一大イベントだ。

この日を迎えるにあたって島内の様子は常になく活発になった。若者も成人もクワイアの練習に余念がない。テニスやゴルフの試合も賞金つきで行われ、ニウエ人も島在住のニュージーランド人も心が浮き立っているようだ。

ニュージーランド在留ニウエ人はこの機会に里帰りしてくる。そのため、通常は週１回の飛行便が先週は木、金、土と３日続けて多くの在外島民をオークランドから運んできた。15 日間かけてオークランドから汽船で帰ってきた者もいる。ここ１週間で島の人口は大きくふくれあがった感じだ。常日頃は見かけない顔ぶれが島のあちこちを物珍しそうな眼差しを周囲に向けながら歩いている。この人たちは体格、容貌、雰囲気、態度は島民そのものでニウエ語か英語を話しているが、服装が違う。女はスーツかワンピースを着て帽子を被り、靴を履いている。男はスーツにネクタイだ。子どもたちも上下にきちんと服を身につけ、ソックスに靴を履いている。つまり洋服を着こなしているのだ。この人たちは里帰りしてきた島民と見て間違いない。

この人たちから私は「なぜこんな所にいるのか」と何回も話しかけられ、

＊「南海遊録―ポリネシア　ニウエ島フィールドノート―（1）」は『コミュニケーション文化論集』第７号（2009.3.18 発行）に掲載

村を貫通する島の外環道路

理由を尋ねられた。彼らにとってこの島は父祖の地であり、心のふるさとである。「スケジュール手帳の不要なこの島の生活は憧れだなぁ」とつぶやく中年。「じゃあ、島に帰ってきたらどうですか？」と言うと、「もう無理だよ。都会の生活がしみついてしまったから」と“文明生活”になじんでしまった我が身を嘆くかのようで実は故郷と一線を画している態度だ。

里帰りした親戚をもてなす *kaikai*（宴会）があちこちの家で行われている。家の周囲のゴミが片付けられ、樹木や花壇が見違えるほど端然としてきた。あちらこちらから芝刈り機の音が聞こえてくる。村全体が、そして島全体が清掃が行き届き、美しくなった。

こうして迎えた憲法制定21周年記念日だ。メイン会場である首都アロフィの東部にあるハイスクールの校庭の周囲には朝7時ごろから数多くの屋台が所狭しと設えられた。食べ物、島のみやげ物となる手工芸品や木彫り品、Tシャツやラヴァラヴァ（腰巻）などが売られている。

飲食物を売る屋台が圧倒的に多い。大きめの紙皿にライス、ソーセージ、コーンビーフ、中華そば、サラダ、煮バナナ、タロイモ、鶏肉などから好みのものを選んで盛り付け、1皿5から6ドルだ。人々はこれを朝食にあるいは昼食に買っている。

アロフィの女ペシがトラック屋台を開いている。彼女はココナツ粥を大量に作ってきて売りさばき、大鍋はすでに空になっていた。一度、家に戻って、また作って来ると言う。彼女は毎週、金曜日の朝市で紅茶、コーヒー、ドーナツなどいわゆるファーストフードを売っている商売気のある女だ。これできわめて熱心なキリスト教徒なのである。

＊文中の固有名詞に関して、公職にある人々の氏名以外は事柄の性格上、仮名としたことをお断りしておく。

キャベツ、白菜、スイカ、タロイモ、ヤムイモ、トマト、バナナ、カボチャ、スプリングオニオンなどの野菜を敷物の上に並べて売っている人もいる。粉末ジュースの素を溶かして“ジュース”として売っている人、フルーツカクテルを作って売る人、それぞれ作れるものを作って売り、現金収入を得ている。

島民および里帰り者以外にもパランギ（外国人。主として白人を指す）が若干名来ている。ほとんどが観光客だがワイカト大学の人類学者トム・ライアンも来ている。かれは小さなノートに懸命にメモをしている。ハクプ村、アバセリ村、アロフィ村の顔見知りやインタビュー済みの人も大概来ている。

各大臣たちが威厳に満ちた態度でそれぞれ別の車に乗り、夫婦同伴で到着した。初めに副大臣、ついで３人の大臣たちというように地位の低い順に会場に入ってくる。次にニュージーランド高等弁務官がニュージーランドの国旗掲揚と国歌演奏とともに登場。最後にニウエの首相フランク・ルイと夫人のアイリスがニウエの国旗掲揚と国歌演奏とともに姿を現した。彼らの登場のたびに太鼓が大きく鳴る。ここでハクプ出身だが現在はアロフィ・エカレシア（英国国教会派）教会の牧師であるパエアがスピーチをして祈りを捧げ、記念式典が始まった。

来賓のスピーチと各種の褒章授与の後、トケラウやナウルなど他の島々からの参加者によるパレードに引き続いて在ニュージーランドのニウエ人高校生４、50名によるダンスが演じられた。それはきわめて勇ましく戦闘的で、その後、演じられた島の高校生のダンスと比べてあまりにも強烈な凄みを示したので人々の不興を買った。特に男子のダンスは鬨の声をはじめ力強い掛け声を伴う。槍を持って勇気を鼓舞するような、相手つまり敵を威嚇するような掛け声に満ちている。war dance も神に捧げる踊りもどちらも勇ましい。自らの腕や脚を力強くバシッと叩いて大きな音を出すなど、動きが相当に激しいので多くの踊り手たちがハアハアと肩で息をしている。無理もない。彼らはニュージーランドの都会育ちなのだから。

島の人々によると、ニウエの伝統ではダンスに叫び声などは入れないという。ニュージーランドから来た高校生のダンスはマオリ・ダンスの真似であり、あんなのはニウエ的ではない、と評判が悪い。

記念式典は首相夫妻主催という形の夜のカクテル・パーティで締めくくられた。ニュージーランド国代表部や在留ニュージーランド人をはじめ、海外

からの招聘客や私のように偶々来島していた外国人や島および各村の重だった人々が招待されていた。会場となった *fale fono*（国会議事堂）のホールには立錐の余地もないほど人の輪ができたが、その間を縫うように歩いている人もいる。見ていると、同村の人々を探し合って固まる傾向が見られた。他の村の人でも多くの場合、何らかの親族関係があるので、互いにどの村の誰かは知っているから、会えば親し気に言葉を交わすが、やはり同村の人々と固まっている。特に女たちにその傾向が強い。

1994 年 10 月 21 日（金）

早朝、村の教会堂わきの鐘つき堂で鐘を鳴らすのは村の教会の執事つまり村の有力者である。一の鐘は朝のお祈りの時刻を知らせるものだが、日によって鳴る時刻が異なる。彼が目覚める時刻がずれるのだろう。5 時 15 分だったり、5 時半だったり 5 時 40 分だったりする。この日は 5 時半に鳴った。いつもヴァイレレ家のクラとメレ夫妻は朝のお祈りは省略するが、メレの妹フィシが逗留中は欠かさずに行っている。フィシが熱心な教会メンバーで教会員としての行動細則を遵守する人なので合わせているようだ。この朝、クラ、メレ、フィシの 3 人は昨晩、居間でしゃべりながら雑魚寝したので 5 時半に鐘の音で目覚めるとその場で身体を起こして 5 分間、お祈りをした。終わるとそのまま再び横になり、少しおしゃべりをした後、起き出して台所へ直行し、置いてあったパンにマーガリンをたっぷりつけて甘い紅茶に浸し、いつもの朝食とした。クラはこの後、すぐに作業着に着替えて小型トラックに乗り、ブッシュへ向った。プランテーションにある養鶏小屋で鶏の処理をするのである。通常は鶏を絞め、毛をむしり、内臓を出し、洗うという作業はメレが一緒に行って行うが、この日はフィシが逗留しているからかメレは行かなかった。

メレが「飛行場に一緒に行くなら、あと少ししたら出るから用意しておくように」という。私が「あと 10 分か 20 分ですか」と確かめると、そうだ、と言う。私は急いで支度をし、持ち物の準備をした。しかしメレとフィシはしゃべり続けていて結局、出発したのは 1 時間後だった。いつもこうだ。

飛行機は予定よりやや早く、12 時 30 分に飛んできた。今日は来島者はあ

まりいない。圧倒的にニュージーランドに帰る人が多い。今年最大の人出だろう。ニュージーランドに帰るオイ、メイ、イトコ、オジ、オバを見送りに来ている島民たちも多く、飛行場は人で溢れ返っている。ここでまた在ニュージーランドのニウエ人高校生群団の鬨の声が上がった。やはり島民たちはこれに奇異の眼差しを投げかけている。「あんなのニウエの伝統ではない。マオリやトンガやサモアやクックの人たちの文化に汚染されて……」と冷ややかに眺めている地元の人々。

メレが3時半から隣家のラキマタ家で開かれる *kaitupe* へ出かけたので私もついて行った。村の婦人会の中の9人のメンバーでやっている頼母子講のようなもので、2週間に1回の頻度で集まり、当番に1人50ドルずつ渡す。今日はラキマタ家の妻ルアが当番で、彼女は集まったお金でガス・オーブンを買いたいと言っている。当番はその日の飲食物を提供するが、今日はココナツ粥がふるまわれた。

午後6時ごろ隣家から歌声が聞こえてきた。太鼓の音がお寺の木魚のようなリズムで鳴っている。*kaitupe* の後、女たちが今夜のダンス・フェスティバルの練習をしているのだ。まもなくメレが大騒ぎしながら戻り、すぐに出かける準備をしろ、という。6時20分、ヴァイレレ家全員で出発。アロフィのフィシの息子の店で注文してあった食べ物を1皿受け取る。メレが私にチップス（フライドポテト）を2袋買え、と言うので買った。7時にアロフィの文化センター広場に着く。すでにたくさんの車が並んでいる。我々は駐車スペースをようやく見つけ、1～2ドルの募金をしてから中に入った。急ごしらえの舞台が広場につくってあり、大勢の地元の人々がフェスティバルが始まるのを今か今かと待っている。

各村から歌や踊りや寸劇のグループが出場し、競う。ハクブ村からは3、40代の男女のグループと40、50、60代の女達のグループが出場し、島歌を歌った。歌といっても踊りが必ず結合している。どちらかというものはない。歌は踊りを伴い、踊りは歌を伴う。演劇も歌および踊りと結合したものである。

2袋買ったチップスのうち、1袋をメレに渡してクラと食べるように言い、残りの1袋は、私が少しつまんでからヴァイレレ家の養女ファネにもすすめ

ると、彼女は半量ぐらい大づかみにして持っていった。フィシに残りを渡そうとすると、メレが、それをこっちに寄こせ、フィシには渡さなくてもいい、こっちで食べる、と言う。暗闇の中だったがフィシは気がついただろう。私が買ったチップスはこのようにしてメレのところで止まってしまい、フィシが買った食物もメレのところで止まってしまって、私のところまでは来なかった。たくさんあるものは惜し気もなく人に与えるが、少ししかないものは人に知られないようにして我が物とするようだ。“分かち合いの社会”というが、それは建前であり、人の目の及ばない所では人より多く取り、食べようとする。分かち合いを建前とする平等主義社会でも本音のところは人より多くほしがるものだ。

従ってこの日の私の夕食はポテトチップス5、6片のみであった。ま、1食くらい食べなくても何とかなるだろう。

フェスティバルが終わって10時ごろ村に帰宅。皆、腹ペコだ。メレもあれでは足りないだろう。夫のクラはほとんど何も食べていないのに何の不満も言わない。子ども達はスナック菓子を食べている。空腹になるとその辺りにあるものを手当たり次第に食べるから、子どもたちにニュージーランドやアメリカから来るジャンクフードが浸透するのも当然だろう。帰宅するなり大人たちは皆、パン、ビスケットなどを食べ始めた。それらを甘いミルク・ティーに浸して食べるのが大好物だ。子どもにもそれを与えている。居間のソファ、ソファベッド、万年床で食べながらしゃべり、食べ終わると食器をその場に置いたまま、その場で身体を横にしてしゃべり続ける（こうした食器がいつも居間には転がっている）。そしていつの間にか1人眠り、2人眠り、やがて皆、眠ってしまった。大人は新しい晴れ着は着替えるがそれ以外の服は着替えることもなく、着の身着のままで眠る。成人男子はズボンをラヴァラヴァに替える。子ども達は晴れ着のまま大人たちの間で眠ってしまう。寝室はあるが居間で文字通り、雑魚寝だ。

1994年10月22日（土）

母方オバのフィシにピックアップを頼まれて絶対に断れないキリ。もちろん、母親のメレに頼まれた時もそうだ。頼まれるというよりも命令されるのだから否応無しだ。自家用車が普及し始め、どこへ行くにも（わずか数軒先

の家にも）車に乗るようになった。しかし全員が車および運転免許証を持っているわけではない。持っていない者は家族や親族に頼らざるを得ず、また持っている者は家族、親族の移動に全面的に協力しなければならない。お互いに協力するのが当然だから頼まれたら絶対に断れない。親族ではなくとも、同じ村の年長者の言うことに逆らうのは難しい。

彼らの生活に全般的に計画性のなさを感じるのは私の出身文化の故であろう。彼らの“その日暮らし的伝統”を良くも悪くも身にしみて感じる。食事に関して言えば、宴会や日曜礼拝後のウム（蒸し焼き）料理作りを除いて、通常の食事の準備をあらかじめ行う、ということがほとんどない。朝食、昼食、夕食ともまさにその辺にあるもので済ませる。残り物のイモ類、ビスケット、パンなどがあれば食べ、なければ食事抜きである。実に気楽だ。

使用後、物を片づけたり、次回に使う時のことを考えて適切な処置をしておくということは一切ない。使いっぱなし、置きっぱなしだ。口紅のふた、歯磨きのふた、洗剤のふた、ふたというふたを閉めない。裏庭の出入り口わきに置いてある台の上には洗剤の空き箱が二つ、コップ、ライター、誰かの靴下片方等々が大分前から置きっぱなしだ。誰かのパンツ（下着）が物干しロープに長期間、結わえ付けられてある。雨が降ってもそのままだ。必要になったら取りに来るのだろう。

キリの娘シアヒの服があちこちに落ちている。床の上、ベッドの上、ソファの上、車の中、裏庭、どこにでも落ちている。汚れきってしまっているもの、薄汚れているだけのものなど様々だ。1週間も放置されているものは雑巾にしかならないと思うがそのままだ。まだ着られる服も床に落ちたままにしておいて次々と新しい服を着せている。

床に落ちているものはその他にスプーン、フォーク、洗濯バサミ、汚れたおむつ、靴下片方、靴片方等々。スプーンやフォークはどこにでも落ちている。車の中の座席の上にも下にも。車の中に長い間放置されているものはスプーン、フォークの他、子どもの服、靴下、誰かのシャツ、メレの靴片方、鍵。ある時、「鍵が落ちていますよ」と言ったら、メレが取ってポイっと車の外へ投げ捨てた。

トイレの中では使い終わったトイレット・ペーパーの芯がもう6個もたまっている。誰も捨てない。ペーパーがなくなると新しいのを持ってくるが、

ハンガーに掛けずに汚れた床の上に置いたまま使っている。

ハクプ村にはパンを焼いて売っている家、食料品や日用品その他細々とした日常用品を売っている家、T シャツやラヴァラヴァを作って売っている家、養鶏をして鶏肉を売る家などがあるが、看板を出しているわけでもなく外から見ても普通の家だが、島の人々は知っていて買いに来る。彼らは他の村人とまったく同じ生活をし、買い手のことを慮って在宅に努めるでもなく、自分の都合で留守にする。買い手もそれに対して不満を述べることはない。商店の発生とはこういうものだったのかもしれない。

1994 年 10 月 23 日（日）

教会の鐘は今日は朝 5 時半に鳴った。ヴァイレレ家では今朝は妻のメレが朝のお祈りをしている。5 分間ほどの長いお祈りだった。私のことも祈ってくれている。

6 時ごろからウム料理の準備にとりかかった。日曜日は sabbatical すなわち労働を禁じられている日であり、前日中に日曜のご馳走の用意をしておくという規範は依然として人々に共有されてはいるが、現実には、特別に盛大な宴会をする場合以外は土曜日すなわち bush day にブッシュでの収穫を済ませておき、日曜日の朝から収穫物の皮むきなどを始める。メレが中心になり、クラとファネはめいっぱい働かされている。11 才のファネは忙しそうに走り回り、クラはココナツの果肉を削ったりカボチャを切り分けたりして

ブッシュでタロイモを植える

いる。クラ・メレ夫婦は外台所で何かしんみりしゃべりながら作業している。

娘のキリはまだ起きてこない。赤ん坊のいる母親は働くことをかなり免除されているようだ。家事労働よりも赤ん坊の世話が優先されるように思われる。彼女は20代前半だが台所の主な働き手ではない。彼女がしている家事の種類と量は兄のネリと同じぐらいに見える。床の掃除や皿洗いやテーブルの上を片付けてクロスを替えるなど、時々、思い出したようにやっているだけだ。しかし母のメレは運転ができないので、キリは頼まれると必ず車を出す。また車で買物には行く。だが大体、一日中、シアヒを他の家に預けてベッドの上でゴロゴロして音楽を聴いていることが多い。両親も兄もそれについて何も言わない。

7時少し前に我々は朝食となった。斜め向いのスミス家で焼いて売っているパンが売り切れていたので、皆で甘いミルク・ティに硬いクラッカーを浸して食べた。

9時半に日曜礼拝の第1の鐘が鳴り、20分後に第2の鐘が鳴った。激しい雨の降る中を私はメレと傘を差して歩いて行った。ファネがすぐ後ろをついて来る。教会に着くとファネはその傘を持って家に帰った。雨の降る中をメレと私は傘を1本ずつ差し、ファネは濡れたままついて来たのだ。メレはそれにまったく頓着しない。ファネは昨日、ブッシュで雨に降られ、夕方からくしゃみを繰り返していたので、風邪を引くといけないから私の傘に入るように言ったのだが、「大丈夫」と言って入らなかった。

教会には大人も子どもも男も女も精一杯めかしこんで来るが、着くなり、子ども達は靴を脱ぎ、裸足になって走り回っている。大人の女もそうだ。今

正装して教会に出掛ける家族

日は隣席にヘレの母カファが座ったが、座るや否や靴を脱いでバッグに入れてしまった。まだ人々は裸足の方を好むようだ。

教会にやって来る子ども達を見ているとたいてい祖母、オバ、姉、その他の親戚と一緒に来る。祖母もオバも子どもに対する態度は実母と変らない。叱りつけたり、殴る真似をしたり、可愛がったりしている。ネリの長女シファがパルア（祖母のイトコの妻）に連れられてやって来た。ここ数日、シファはパルアの家に寝泊まりしていたのだ。シファはパルアに頭の先からつま先まできれいに整えてもらっておめかししてやって来た。その態度も雰囲気もどう見ても実母子だ。

夫婦が教会に一緒に来ることはあまりない。たとえ一緒に来ても会堂の中では離れて座る。それほど厳密ではないがおおよそ会堂の中の祭壇に向って左手の列には男性が、右側の列には女性が座る。中央の列は性、年齢が雑多だが圧倒的に女性が多い。ヴァイレレ家の向いの家のイラ夫妻のみは賛美歌のリーダーなので毎回、中央列の前方３列目のオルガン弾きの後ろに並んで座っている。まるで指定席のようだ。

礼拝に来る成人女性たちのおしゃれは凄まじい。普段はまったく服装にこだわらず上下の組み合わせにも無頓着な人々なので、見違えてしまう。もちろん、中には普段着で礼拝に来る人もいるが。毎週異なる服を着てくる人も、午前と午後の礼拝に服を替えてくる人もいる。服に合わせて帽子を替えてくる人もいる。本日のルアのワンピースは可愛らしかった。60代だが大きなリボンを後ろでむすんだもので、大変感じのよいブルーの服だった。自分で作ったものだという。服に合ったブルーの帽子には大きなピンクのブーケが付いている。素敵な装いで中央列の前から２列目に座っていたが、礼拝の最中に爪の甘皮を懸命に取っていた。70代のヘマタは真っピンクの縁取りレースの付いたピンク一色のワンピースを着ている。これは水洗いできないだろうなぁ。ドライ・クリーニング業者はこの島にはいないし、汚れたらどうするのだろう。何回か着たらその辺に打ち捨てておくのだろう。

1994年10月24日（月）

珍しくキリが流しにたまった汚れた食器類を洗っている。とは言え、洗剤に浸けおかれた食器が水ですすがれることもなく水切り籠に直行だ。我々は洗剤のついた食器を使って食べていたのだ。鍋類も洗剤の泡がたくさん付い

ているのを「洗った」と言っている。

ヴァイレレ家で私は時々、夕食を作っている。もっともここでは毎日３回の食事を作るわけではなく、残り物、もらい物、儀礼や宴会の後、持ち帰った物などあり合わせの食物を食べる。パンやビスケット、ゆでたタロイモだけで済ませることも多いが、なければ抜くこともある。私は日本から送ってきた食材と地元で仕入れた材料を組み合わせて和風もしくは中華風の料理を作るが、味のあっさりした和食はあまり喜ばれず残ってしまう。油をふんだんに使い、塩辛いものにはかなり塩を入れ、甘いものはかなり甘くすると「おいしい」と言ってよく食べてくれる。

大型冷蔵庫はあるが食べ残した食物は必ず冷蔵庫に入れるという習慣はあまり定着していないようで、テーブルの上に出しっ放しのことが多い。マーガリンのふたも、コーヒーの袋もコーンフレークスの袋も開けっ放しだ。湿気の多いこの島ではたちまちのうちに湿気るのだが。テーブルの上に出しっ放しの食物は犬、猫、鶏、ネズミ、アリ、ハエと share している。これらの小動物たちは家人の目をぬすんで開け放してある家の中に入ってきて、落ちている食物のくず、テーブルの上や台の上に出しっ放しの食べ物、それに生ゴミ（と言ってもよさそうだがまだ命運は決まっていない）を食べる。彼らも自活しているのだから必死だ。メレやクラは気づくと“Te !”と言って威嚇するが、食べ物が出ているのだから効き目がない。一度は退散するがまた入って来る。

食べ物は誰のものでもそこに（手の届くところに）あれば食べてよい。早い者勝ちだ。誰も文句は言わない。私が果物など自分で食べようと思って買って冷蔵庫に入れておくとすぐに誰かが食べてしまう。キリが買ってきたパイをいつの間にか近所のパルアが来た時、食べていた。「そこにまだある」ということは、誰も食べる意志がなかったことを意味し、従って食べてもよいのだ。先取権が認められるのは土地だけではないのである。

1994 年 10 月 25 日（火）

このごろ、日本のことを忘れようと努めている。先日、珍しく観光で来島

した日本人の３人家族に出会った。彼らが帰国する時に飛行場で再会したが、思わず「うらやましい」と言ってしまった。その上、涙が出そうであまりしゃべれなかった。今の私にとって日本に帰る人と話すのはタプ（＝タブー）だ。

正直言って今の状態から脱したい。子どものころから異文化社会でのフィールドワークを切望していた私は大学・大学院時代、そしてその後も、日本の農村、山村および国外ですでにいくつもフィールドワークを経験している。だからこの社会にもかなりの自信を持って入って来た。しかし今、私の神経はすっかり参ってしまい、切れそうなくらい細くなっているのを感ずる。

家に出入りする各種の小動物たちとテーブルの上の食べ物を share することも、じめじめしたトイレの床に転がっていた雑巾がいつの間にか台所に移動してテーブルの上に乗り、食べ物を包む布巾と交り合っている状況も何とか乗り越えた。しかし、一昨日の出来事ですっかり自信を失った。

その日の夕方、ファネが *ota*（ココナツ汁に一口大に切った生の魚を入れた料理）があるけど食べないか、といってきた。メレに言われてきたのだ。行ってみるとバルコニーではすでにメレとキリが頂き物の *ota* が入った器に指を突っ込んで食べていた。そして私がこれを好きなのを知っていて、私にも「食べろ」と勧める。この時点で食べないわけにはいかず、我慢して１～２片食べた。その夜、腹痛が起こったが、気のせいと考え、薬を飲み、ホカロンで腹部を温めて乗り切った。

こうした環境の中で私の神経は図太くなってゆくのか、それともより細くなってゆくのか見ものだ。病気をせずにただ生きて帰れればよい、と思う。この島に来たのも、こういう環境を選んだのも他の誰でもない、私自身が決めたことなのだ。今ごろ泣き言を言ってどうする？しかし私の表情が次第に硬くなり、顔が尖ってきたのを感ずる。

1994 年 10 月 26 日（水）

今日、ついにアロフィのホテルに行き、マネージャーのニュージーランド人アネットに頼んで３時間ほど１室を借りた。11 日ぶりにゆっくり熱いシャワーを浴び、髪や身体を心ゆくまで洗った。ヴァイレレ家にもシャワー室はあるが冷水しか出ないし、何よりもシャワー室の床で裸足になる気がしないので、時々、身体を手拭で拭くだけにしている。久しぶりの熱いシャワーに

生き返ったようだ。私の表情が全く違うのを感ずる。アネットにもそう見えると言われた。さあ、これでまたしばらくはヴァイレレ家にいられる。俄然、元気になってきた。

しかし、本音のところでは強い敗北感が否めない。生育環境によって形成された生理的レベルの感覚に引きずられ自己を意識のレベルで変えることができなかったという忸怩たる思いが強い。

1994 年 10 月 27 日（木）

村の教会堂の前面に広がるヴィレッジ・グリーン（芝生の広場）から村のメインストリートをはさんで反対側に牧師館がある。それは平屋だが村一番大きく立派な家だ。どこの村でもそうだから、教会のそばにあって格別大きな家屋は間違いなく牧師館だ。もっとも最近では２階建ての家屋がぽつぽつ出現し始めている。ハクプでは村選出の国会議員ヤンギの家と、この日、お披露目されるヘニとカイル夫妻の新築の家が二階建てで他はみな平屋である。

この日、私はヴァイレレ家から２分ぐらいの距離にある牧師館に牧師パヘトンギアの都合を訊きに行った。ヴァイレレ家のメレと息子のネリが、「牧師へのインタビューは私たちがセットしてあげる」と言ってから何日も経つ。いくら待っても埒が開かないのでこの日の朝、８時少し過ぎに私は牧師館へ予定を訊きにいったのだ。以前から村生活の中では親しく挨拶をし、話をする間柄だったので直接、頼んだ方がよい。８時といえば村人にとって午前中の仕事がすでに始まっている時間である。しかし牧師はまだ眠っていたらしい。早朝にヤシガニ獲りに行き、５時ごろ眠ったという。「出直してきます

ヴィレッジ・グリーンで遊ぶ子どもたち

から」と私が言うと、夫人は、起こして来るから待て、と言う。広い会見室に通されて待っていると、前の部屋から裸にラヴァラヴァのみ身につけた牧師が寝ぼけ眼で現れたが、目を合わさないようにしてすぐ奥に消えた。やがてTシャツにズボン姿で現れた。居住まいを正してから正式に挨拶をせねばならないのだ。寝巻き姿では顔を合わせても会わないのと同じである。だから挨拶などしてはならないのだ。

インタビューに都合のよい日時を訊くと、彼は、今すぐでもよい、と言う。しかし半分眠ったままのインタビューではこちらとしては有難くないし、また彼自身もそんなことをされて不満を持たないはずはない。結局、彼がコーヒーを飲むぐらいの時間を考えて8時半に出直し、この日、8時半から9時50分まで牧師と話すことができた。彼は10時から他に用事があると言ったが、それはヘニ&カイル・ウルキタ夫妻の新築祝だった。私も招かれていたのである。

ウルキタ夫妻は前首相の時代は羽振りがよかった。夫カイルは首相の秘書官だったし、妻ヘニは副教育長だった。現首相になってからはこの夫婦をはじめ多くの人が主要な官職から追放され、新たな一派に実権が握られてしまったという。ヘニは嘆いていたが、何のことはない、以前も現在もネポティズムが横行しているのだ。

ウルキタ家の新築祝いは、居住用の2階建て家屋のお披露目とともに村のメインストリートに面して建てられた島で初めてのIT印刷業を開業するための事務所開きを兼ねていた。ニュージーランド高等弁務官、ニウエ首相をはじめ、全島から名士が招待されていた。いつもどおり、まず牧師のお祈りと招待された島の名士たちのスピーチの後、テープカットが行われ、その後、来客全員が事務所の中を一列になってぞろぞろと見学した。真新しいパソコンが新しいオフィスの調度品の中にうまく納まっている。事業開始に先立って妻のヘニは来年、パソコンの講習を受けるためにニュージーランドに数ヶ月間行くそうだ。彼女はニウエの伝統文化に関する本を出版するつもりで資料を集め始めたと言っている。

やがて新築の居宅の一階で宴会が始まった。まだコンクリートを打ちっ放しの状態だがすでに入居して使っている。この島では家屋の枠がほぼ出来上がると入居してしまうのが普通だ。アオガの家だってガレの家だってフォリ

の家だってそうだ。籠や箱に衣類や器具を投げ入れた状態でそこから必要なものを取り出しては使い、そのままにしておく。家屋の内装が完成しても使い方は違わないのだから、雨露さえしのげればよいのだ。

宴会には慣習どおりにヘニ＆カイル夫婦の親戚筋の多くの女たちや親しい村人がたくさんの料理を作って持ち寄っただけではなく、夫妻がアロフィのファーストフード店（フィシの息子が始めた店）に注文した料理も加え、テーブルは花園のように華やかににぎわっている。集まった人々も豊富な食べ物を前にして満足気だ。

だが、宴会が始まったからといって直ちに食べ物を口に入れることができるわけではない。まず、牧師のお祈りと招待客の何人かによる祝賀のスピーチがあり、主人のカイルが返礼の辞を述べてはじめて食べ物が供される。あふれんばかりの料理を前にしてそれにありつくまでの時間がいかなる儀礼においても非常に長い。いわば長い「消費の禁止」期間（時間）を人々は空腹に耐えに耐える。幼い子どももちろんだ。

「食事をどうぞ」と宣言されるや否や、人々は殺到するがごとく食べ物の列に並ぶ。テーブルの上に並ぶ大皿から各自、自分の皿（あるいは大型の葉）に好きなものを取って行く。宴会時の食物獲得における優先順位は、成人女性、成人男性、次に未婚の女性、男性、最後が子どもたちである。台所で大皿に料理を並べ飲み物を作るなど裏方の仕事をしていた親族の女たちも、食事が始まるときわめて要領良く列に食い込み、自分の皿に好きなだけ取り、台所にゴザを敷いて座って食べている。かなり年配の女たちと招待客の女たちには数少ない居間の椅子が勧められる。男たちと未婚の人々は屋外で立って飲み、かつ食べていた。

女たちは、成人男性の食物獲得第１回戦が終わったころから、若者たちの第１回戦とほぼ同時に各自アルミホイルを取り出して、持ち帰る料理をせっせと詰め始めた。ずい分、早い。まだ料理をまったく手に入れていない人もいるのに、次々とテイクアウト用に取ってしまう。彼女たちはこれを楽しみに来ているのだ。

この日、ハクプ村のウルキタ夫妻と遠近の親族関係にある人々はもちろん来ていたが、妻ヘニの出身地アバセリ村からも親族が大勢来ていた。

ここでこの家を建てた大工夫婦と知り合いになり、しゃべり込んだ。彼らはフィジー国籍だがロツマ島民で、11 年前にニウエ政府の公募に応募して

来島した。いわば出稼ぎである。故郷のロツマ島への思いがことのほか強く、何かにつけてニウエとロツマを比較している。彼らがニウエの人々に対して最も我慢ならないのは、ロツマは首長制をもち階層化されているから下位の人々は上位の人々に対して恭順を尽くす礼儀正しい社会である、それに対してニウエは元来、階層化された社会ではなかったから上位、下位の人々の間に秩序ある関係が見られないことだという。一方、フィジーのような南太平洋では産業が多少なりとも発達した社会を経由してやって来たこの夫婦はニウエ島の産業の未発達さを冷ややかに酷評する。それでもこの二人はこの島の生活に適応しているように見える。夫は大工業だが妻は洋裁を生業とし、北アロフィの借家の一部をブティックとしている。また妻はケーキ作りを趣味として毎週金曜日に開かれる市場にはスコーンやケーキを焼いて売りに行くのだそうだ。話しているうちに、先日、市場で話しかけてきたハイスクールの女生徒が彼らの娘であることが分かった。彼女は日本の若い女の子と英語で文通したいと言っていた。

この日の夕食を誰も作ろうとしない。11歳の養女ファネは作ろうと思えば作れるが課せられているわけではない。むしろ後片付けが彼女の仕事だ。母親のメレ、娘のキリ、あるいは私が作るのを待っている構えだ。私は流しに鍋や食器類が汚れたまま積み重なっている時は食事作りをしないことにした。誰も作らなければパンかビスケットで済ませるだろう。この日、キリがようやく7時半ころに台所に立った。皆、空腹のまま不平も言わずに待っている。クラによれば、彼が子どものころは、朝、起きると前日の残り物を適当に食べてブッシュに行って一日働き、昼食は何も食べないか、ブッシュに生っているココナツやバナナを食べ、午後4時ごろ家に帰ってから手当たり次第に食べたという。1日3食をきちんと食べる習慣はまだ定着していないと見受けられた。

キリのように幼い赤ん坊がいる女は未婚だろうと既婚だろうと労働の分担が少ないようだ。赤ん坊と一日中戯れていても非難されない。10歳ぐらいになると子どもは一通りの家事をこなせるようになる。ファネなど、家中の洗濯、掃除、台所の食器洗い、イモ類をゆでること、幼い子どもの世話、など何でもこなす。ただし、料理は手伝いはするが任されていない。

22歳のキリは遊びたくて仕方がない。私が食事作りを始めると単純に、素

直に喜んでいる。夜、長女のシアヒを寝かしつけた後、遊びに出かけることもあり、男友達がやって来て彼女の部屋で過ごしていたり、夜遅く、男友だちと帰ってきたりする。両親のクラとメレはそれを知っていて何も言わない。

1994 年 10 月 28 日（金）

朝、起きると台所のテーブルの上から猫があわてて逃げて行った。テーブルの上にはかじりかけの食パンが残されていた。メレに告げると、「ま、いいわ。捨てるから」と言う。食物は戸棚にしまっておけばいいのに。衣服も、着た後、山のように積み上げておくからさらに汚れてしまう。長期間経ってから洗うから汚れがおちない。そしてつぎつぎに新しい洋服を着る。ニュージーランドへ行った時に買ったり親戚が買って送ってくれたりするのだ。キリの娘シアヒは見るたびに違う洋服を着ている。一度着たら放ってある服が多い。実に無駄が多い。しかし、物を大事にしない、と思うのも私の価値観ゆえであろう。

いよいよフィシが本日の便でニュージーランドへ帰る。彼女が持って帰るお土産が島の親戚中から集まり、長男の嫁ヘカリの父親が経営を任されているアロフィのニウエ・ビールとニウエ蒸留水製造工場の一隅に保管されていた。食物入りの大きなポリバケツが 4 個と大きな袋だ。直ちに宴会が開けそうなくらい大量の食糧だ。それらをヴァンにのせて飛行場へ運ぶ。

飛行場ではフィシ宛の手紙やお餞別がさらに続々と届く。何かというと 20 ドル紙幣が使われる習慣があるから恐らく封筒に入っているお餞別は 20 ドルだろう。ずい分、高額なお餞別が集まったものだ。

フィシの長男コナの次女シアレ（8 歳）は祖母に引き取られニュージーランドで生活している。今回は祖母とともに島に帰り、一ヶ月間を島で過ごした。両親の許で嬉しそうに過ごしていたが、この日、フィシと一緒にニュージーランドへ帰る。フィシはシアレに甘く、金遣いに関していいなりになっているようだ。色々な理由を見つけてはフィシからお金をもらい、食べ物や飲み物を買っている子だ。それも無駄が多く、まだ残っているのに新しいものをほしがる。するとフィシは困ったような顔をしながらも買ってやる。この日、シアレは飛行場の売店で売っていた安物のネックレスを祖母にねだったが、さすがのフィシも断った。しばらくしてシアレは母親と手をつないて

空港で飛行機の到着を待つ人々

歩いてきたが、売店の前に来ると母親の胸に顔を埋めて泣き始めた。別れを惜しんで泣いている風情だ。母親は何ともいえない表情をしながらシアレを外へ連れ出した。程なくして次にシアレを見た時、泣き顔はすっかり消え、ほしがっていたあのネックレスを身に付けていた。母親はねだられた挙句、なだめるためにネックレスを買ってあげたのだ。

飛行場はニュージーランドへ行く人、帰る人で混雑している。ヴァイレレ家はクラ、メレ、キリと私がフィシの見送りに来ていた。長男ネリ夫婦は来ていない。ネリの妻イヴァは来ていたが、他の人の見送りだったらしく、ヴァイレレ家のそばへは来ず、最後にちょっとフィシに挨拶しただけだった。ポリネシアでは兄弟姉妹間の結束がきわめて強く、それを反映してオジ・オバとの絆も強調して語られるが、ヴァイレレ家の長男夫婦の行動を見る限りでは規範と現実との乖離が見られる。規範が崩れつつあるのか、それとも規範が規範として成り立つための社会的条件が変化したのか。

飛行場からの帰途、ヘニの家へ寄ったら、大きなココナツと *ulihega*（サバの一種）を３匹くれた。このことをヴァイレレ家に戻って言ったら、クラもメレもほほえみながら大きくうなずいて大変満足そうだった。誰々から何々をもらったと報告するといつも満足そうな顔をする人たちである。この日は *ulihega* を使って私が夕食を作った。

1994 年 10 月 29 日（土）

今日はムタラオ村の祭り（*fiafia*）の日だ。朝、起きていくと、メレがい

きなり「用意はできたか、すぐ出掛けるよ」と言う。昨晩までキリは行くけどクラもメレも行かない、と言っていたのに変っていた。キリは行かず、クラとメレが行くことになっていた。

クラの運転でムタラオ村へ。この村は島の北端にあり、キリスト教を最も早く受容した、すなわち“文明開化の最も早かった村”だ。進取の気性に富んでいて、何でも進んで取り入れる村と言われている。ハクプから行く場合、リク村とラケパ村を通る。ハクプ村からリク村への途中、道は鬱蒼とした熱帯雨林の中を通って行く。クラは道の右側を指して、「このあたりはずっとメレの土地だ」と言った。そしてややあって、「ここまで」と言った。何の目印もなく、私には他の場所と見分けがつかなかったが、島の人には分かるのだ。“メレの土地”と言ったが、正確には“メレが権利を持つ土地”すなわちメレの先祖の土地という意味である。1区画に数人から数十人が権利を持っているので、個人から見るといくつもの土地区画に権利を持つのだ。土地が個人のアイデンティティの基盤に置かれている島の人々は、子どもから老人までしばしば「そこも私の父（母）の土地、あそこも私の父（母）の土地」という。聞いていると一人が村の大半の土地を所有しているように聞こえるが、村内の複雑に絡まりあった親族関係の下では土地に対する権利関係も入り組んでいて、必然的に個人が権利を主張する（可能性のある）土地は広範囲となる。

島内13カ村が毎月順番に村祭りを行う。今月はムタラオの番なのだ。農産物、海産物、手工芸品等の生産物の展示・販売をし、女たちは競って各種のウム料理、菓子、アイスクリーム、ジュース等を作って販売する。島中の人々の月1回の大きな楽しみとなっている。紙皿にのせたウム料理を買ってその場で食べたり、家に持って帰って食事にしたりできる、まるで彼らのファーストフード店だ。観光客の少ないこの島ではこうした *fiafia* に集まってくるのは島民ばかりである。

この日、目立ったのは *uga*（ヤシガニ）だった。*uga* にも各種あり、赤いもの、青いもの、黄色が入ったものなど色彩がとりどりだ。サイズも種々ある。大きく見事なものは年齢が4、50歳を越えているヤシガニである。大きなものはかなり力が強いらしく、重い鉄製の物体につながれていた。

魚も各種並べてあった。赤い魚や目の覚めるような青色に真黄色の斑点の

あるものなど、とりどりの色彩に目を奪われる。日本の観賞用の熱帯魚もそうだが、色彩の鮮やかさが熱帯の魚類の特徴だ。

そういえば真っ赤なアイスキャンディを売っているヴァンの周りは人だかりがしていた。毒々しい色だが人々の人気を集めていた。

USP（南太平洋大学）ニウエ分校の秘書をしているヒナに会った。彼女はムタラオの人だ。彼女の家に案内された。外観は立派な造りだが、やはり中は散らかし放題だ。入り口近くの小部屋に数十足もの靴がバラバラにして折り重なるように詰め込まれてあった。家族全員の靴だろう。そういえばイヴァの家では大きなダンボールに家中の靴がこのようにして放り込まれている。人々はその中から片方ずつ探し出して履いてゆく。

1994 年 10 月 31 日（月）

日曜日の礼拝でいつも私の左前方に座っている 40 歳くらいの顔色の悪い、ポリネシア人にしては愛想のよくない女がいる。ポリネシア人は男女ともおおむね声が大きいが、彼女は珍しいくらいに小さな声でしゃべる。今日は彼女とじっくり話した。このごろ、島でも風邪をひいている人が多いが、彼女も咳をしていたので vicks の咳止めをあげたことがある。今日、その咳止めがよく効いたと喜んでいた。彼女の娘はアロフィの法務局で受付をしているので、私は家系図調査の時にいつも会っている顔見知りである。

この女性エフェの現在の夫はトンガ人で、その間には子どもはいない。彼女の第 1 子と第 2 子の父親は別人だがどちらも村の人である。第 1 子の父親は現在も村に住んでいる。他の女とも付き合っていたので結婚はしなかった。第 2 子の父親は、しばしば人々の口の端にのぼる実の妹と結ばれてしまった男である。だから結婚しなかった、とエフェは言う。

この兄妹婚をした 2 人は非難ごうごうの中、村の有力者の忠告により 2 人でニュージーランドへ行ってしまった、と聞いている。2 人の間には子どもが 2 人いるが、どちらも障害者だという人がいるが、確実なことは分からない。

現在のニウエ人は、実のキョーダイ同士はもちろんのこと、イトコとの結婚も忌避すべきであるという規範をもっていることは確かだ。しかし、家系図で 2〜3 世代遡れば、イトコ婚は珍しくなく、実のキョーダイ婚もある。イ

ンタビューの中で、伝来の土地保有制度の下で強力な土地権を確保するために実のキョーダイ同士の結婚も行われた、と言っていた70歳くらいの人もいた。近親婚を忌避するようになったのはヨーロッパ人の価値観の導入後であろう。いずれにしても親族関係が複雑に入り組んでいる村の中でイトコまで避けねばならないとなると結婚相手を探すのは至難の業だ。

ヴァイレレ家の並びの数軒先にいつも白い服上下を着て、白い肩掛けバッグを提げ、杖を付いて歩いている（と言っても教会へ行く時くらいしか外出しないが）年配の女がいる。彼女はいつもベランダの椅子に座り、道行く人を眺めている。こちらが彼女を見ると手を振り、「どこに行くの？」とか「どこに行ってきたの？」と訊く。顔を合わせないようにして通る時は話しかけてこない。彼女の名はホキといい、エフェの母親だ。

本日、ホキ宅を訪問した。子どものことを詳しく訊いても「たくさん」と答えるだけだ。実際には第1の夫との間に8人、2番目の夫との間に1人、3番目の夫との間に1人産んだ。確かにたくさんだ。「みんなにホキさんは本当に良い人ですね」と言われることと「私はみんなに愛されています」を繰り返す。老人性痴呆らしい。年齢は84歳なのに自分では92歳と言っている。美しい容貌で英語もしっかりと話す。3人目の夫との間に生まれた実の娘が背後の家に住んでいて食事、洗濯などの世話をするが、基本的には独りで過ごしている。

結婚式の準備をする女たち

豚の丸焼き（ウム）を作る男たち

1994 年 11 月 5 日（土）

早朝 5 時ごろから隣家のラキマタ家の裏庭はにぎやかだ。女の声、男の声、子どもの声などのざわめきが聞こえてくる。今日はラキマタ家の妻ルアの妹（ニュージーランド在）の息子ハイアの結婚式だ。ハイアは島に戻り、父方 *magafaoa*（親族集団）の土地に建つ空き家――それはラキマタ家とヴァイレレ家の間にある――に住んでいる。花嫁はメレの親族でアロフィの女性と結婚しアロフィに在住しているチャーリーの娘のドリスである。2 人はすでに同居していて生後 7 ヶ月のジェニーという娘がいる。また夫妻それぞれに以前の coupling の時に生まれた子どもが一人ずついて、時々、5 人で一緒に過ごしている。

早朝から親族が大勢集まり、裏庭で宴会の料理づくりがすでに始まっている。他村に婚出した人々も来ている。知った顔ばかりだ。仕事は男女別および 10～20 歳代、30 歳代、40 歳代、50～60 歳代とおおよその年齢別に分かれて作業している。女たちは座り込んでにぎやかに談笑しながら魚、鶏、タロイモ等のウム料理や *ota* の準備をしている。バナナの葉に包まれたウムの食材の包みが山のように重ねられていく。男たちはウムのための焼石の準備と豚の処理に余念がない。12 頭の豚を殺して皮の毛を剃り、洗い、内臓を取り出してそこに焼石を詰め､塩とバターをなすりつけてバナナの葉で包む。この豚の包みをトラックで炉に運び、蒸し焼きにするのだ。炉の最下層に焼石を置き、バナナの葉で包んだ豚をその上に置く。その後、順にバナナの葉、アルミホイル、枯れたバナナの葉、ココヤシの葉、バナナの葉、ココヤシ葉、その上に紙など燃えやすいもの、最後に周囲を熱い砂でおおう。1 時間半か 2 時間で豚のウムは出来上がる。この仕事はすべて男の仕事だ。主に 10 代、

結婚式が終って教会堂から出てきた新郎と新婦

20代、30代が働き、40代は後ろで座って見ている。男の仕事には指揮する命令統括者が複数いて、彼らが大声をかけて若者たちを動かしている。彼らも若者たちと同じくらい働く。また、時には彼らだけで動くこともある。

バケツに取り分けられた豚や鶏の内臓は10歳以下の子どもたちが自分たちで焼いておいしそうに食べていた。小さな子どもたちも大勢来ていてうろうろしたりのぞいたり、楽しそうだ。幼児の世話は10歳以下の少年・少女たちの役割である。14、5歳の少年は良き働き手として大活躍だ。知恵遅れの人も籠を編むなど出来る仕事をして参加している。

結婚式は午後2時からハクプ村の教会で牧師パヘトンギアの司式により行われる予定であったが、2時になっても2、3人しか参列者が来ていなかったので40分遅れて始めた。式への出席者は意外に少なかった。第2部の宴会に大勢来るのだろう。結婚式は男女の付添い人、誓詞、指輪の交換、教会の婚姻届への署名など全くヨーロッパ式だ。ただ、皆の前でキスをする時に花嫁、花婿は照れ、それを見て皆がクスクス笑っていた点がヨーロッパ的ではなかった。

ラキマタ家の妻ルアが花婿の母親のようにかいがいしく立ち振る舞っているが、花婿ハイアの母親はルアの妹である。彼女はニュージーランド住まいだし、ニウエではルアがハイアの母親になりきっている。またハイアの娘ジェニーの面倒を看ているルアはどこから見ても実の祖母としか見えない。

結婚式が終わってから皆、各々の車でアバセリのはずれにあるアイランドスタイル・レストランに移動した。そこには教会での式には出ず宴会が目当ての大勢の招待客がすでに集まっていた。新夫婦の親族の女たち（私も含めて）が総出で作った料理もすでに運び込まれており、あとは新カップルとそ

の家族を待つばかりだった。3時半、全ての準備が整い、皆もそろっているのに、なかなか始まらない。相変らず待ち時間が長い。人々は所在無げに店のスピーカーから流れてくる音楽を聴いて待っている。皆、空腹のはずなのにこの「消費の禁止」状態に当然のこととして身を委ねている。

だから、いざ「解禁」となった途端、人々は食物に殺到する。ドリスの母親が娘の結婚式のために肥育していた巨大な豚が丸焼きとなって花嫁、花婿の前に置かれ、ひときわ目立っている。料理を取りに行く順番はやはり成人女性からだ。その後が成人男性である。食べる場所は屋内のテーブルや椅子はほとんど成人女性に占拠され、男性は屋外か外に近い屋内で立って食べている。若者たちは皆、屋外で立って食べている。

女たちは食べきれないほど大量に皿に盛る。家に持って帰るのだ。ここでもメレの活躍ぶりが発揮された。そもそも家に持って帰るつもりで大きな籠を持参してきた。大皿に添えてある取り分け用のスプーンを独占しているのに、ポテトサラダを手づかみで一度に大量にぐにゅっと取る。スプーンでは物足りないらしい。彼女が自分の皿に料理を山盛りにしてきて食べている時、ファネがやはり山盛りにした皿を持ってきた。するとメレは「ここに置け」と言って彼女に皿を置かせ、さらにもう一皿取りに行かせた。そしてファネが取りに行っている間に彼女の皿から食べ物を取って食べている。自分の分は確保して手をつけず、人の皿から食べているのだ。

メレと私が料理を取りに行く時、ファネは席に残っていた。私は飲みかけの缶ジュースをテーブルに置いていったが、戻ってきたら、ファネがそれを全部飲み干していた。他人が口をつけたものに対する特別な忌避感情はないのだ。

食事が終わった頃、スピーチが始まった。一人一人のスピーチは長い。その後、2人の少年が踊り、大人と子どものダンス、大人たちのダンスと歌が続き、最後はハクプ人全員の力強い歌と踊りだ。中心は50代、60代の女たちだが、ハクプから他村へ婚出した女たち、男たち等、ハクプの *magafaoa* に属する人々も入るから大人数となり、大合唱しながら大きな踊りの輪ができた。私もその一員だ。花嫁も花婿も含め、皆、汗をかいて踊りかつ歌った。そして結婚披露宴は終わった。

歌や踊りの最中、招待客は新夫婦の席の前に広げられた大きな布の上に“Good luck !”と言いながら10ドル札、20ドル札、あるいはコインを投げ

入れていた。

ハクプのヴァイレレ家に帰ったのは8時半だった。

1994年11月12日（土）

今日はヒクタヴァケ村の教会の新教会堂お披露目の日だ。旧会堂は海縁の断崖上に建っていたが、1990年1月のサイクロン・オファで壊滅し、4年ぶりの再建である。新会堂は海崖からやや離れた、道路より山側に建てられた。教会堂新設の際のお披露目はポリネシアでは盛大な儀式となる。この日も全島から人が集まった。

午前10時開式といわれていた。朝、出発時間を確かめたら、メレは「8時か9時」と言う。1時間も差があるのに気にかけない。我々は“時間を無駄にする”とか“時間を節約する”などと時間の使い方に損益感をもつが、ここの人々にそのような観念はほぼないことはすでに体得した。8時以前に、「さあ、出かけるぞ。用意はできたか」と言われてもよいように準備をしておけばいいのだ。ところが9時近くになって電話が入り、宴会の料理の準備が間に合わないので開会は大分遅れるという。「何時に出る？」と尋ねると(すぐ時間を聞く習性に我ながらおかしくなる。ここの人たちには大した問題ではないことなのに)、「11時か11時半ごろだろう」とメレは言う。

10時ごろ、メレのイトコの妻パルアが小学生の息子トリウと向かいの家の妻イラを乗せて黄色のピックアップでやって来た。ヒクタヴァケはハクプとは島のちょうど反対側の位置にあるが、時速50キロで外環道路を回っても1時間しかかからない島だから30分もあれば着く。案の定、早すぎた。まだ人々は数えるほどしか来ていない。皆は初めはおしゃべりに興じていたが、その内、ただボーっと座って待っていた。

この島ではこのように何かが始まる前や何かと何かの間に所在無く待たねばならない時間が必ずあり、人々はじーっと座り込んでボーっとしている。何時間も何にもしないで過ごすのはかなり難しいことだが、彼らにはそれができるのだ。大得意といってもよい。私にとっては、写真を撮ったり、スケッチをしたり、他村の人たちとおしゃべりをするよい機会だったが、同じ状況で3時間も待つのは辛かった。途中から観察に重点をおいた。

午後1時過ぎにようやく開式が宣言された。テープカットをしてから礼拝が始まる。首相はもちろん、各村の教会の牧師たちの他、ニュージーランド

ココヤシ葉で大籠を編む

のニウエ人教会の牧師たち、それに島のカトリック教会の神父まで招待されている。祈祷、説教等基本的には通常の礼拝の形式をとっているが、賛美歌が多い。村別に賛美歌を歌うので、会堂の中ではほぼ村ごとにまとまって座っていた。

4時半ごろ礼拝が終わって宴会へと移る。この時、礼拝堂のトイレへ行ったら、この日、テープカットをしたばかりの真新しい施設のはずだがすでにかなり汚れていて、便座は腰掛けるのがはばかられるほどだった。

宴会の部に移ったからといってすぐに食べ物を口にできるわけではない。まず型通りに牧師たち、それに首相や大臣たちのスピーチが延々と続き、最後に牧師のお祈りが行われてから食べることが許される。すなわちここでも食の解禁の前に長い食の禁止時間がおかれるのだ。

教会前広場に仮設されたココヤシ葉で葺いた大きな小屋掛けの中に長テーブルを10列ぐらい並べ、その上に豚の丸焼き、鶏、魚、タロイモ、ヤムイモなどアルミ箔で包んだウム料理を山と積み上げてある。トラックで運び込まれたこの食物の山はヒクタヴァケの人々を中心に他村の親戚も協力して用意したものである。

ようやく本当に食の解禁となった。この時が凄まじかった。食べ物をめがけて会衆はどっと殺到し、我勝ちにアルミ包みをつかみ、ココヤシ葉で編んだ大きな籠に取り込み始めた。籠に入れながらイモや肉を抱え込んでむさぼるように食べ、食べながら別の包みを自分の籠に放り込んでいる。この争奪戦に参加していたのはほとんどが女たちであった。このココヤシ葉の籠は主催者のヒクタヴァケの人々が編んで希望者に配っていたが、皆に行き渡らなかった。それを見越して籠を持参した人たちも多かった。メレも格別大きな

籠を作って持ってきていた。自身、その場で口に頬張りながら籠にも取り込んでいる。メレの取った分量は凄まじい。籠の底が抜けそうなほどだ。私にも、鶏肉とタロをもっとたくさん取れ、などと指図している。

人々は持ち帰り用の籠に充分に詰め終えるとそれを一たん自分の車の中に入れてから戻ってきた。そしてさらにお腹がはち切れるほど食べると、腰を下ろして今度はゆっくりと食べながらおしゃべりを始めた。この間はごくわずかな時間だったような気がするが、あっという間にあれほどたくさんあった食べ物の山が消えてしまっていた。

私はというと、分捕り合戦をあっけに取られて見ているだけだった。空腹のはずなのに、薄ピンク色のスイカを１切れのほか、豚の切れ端１切れとタロイモを少々食べたがすぐに満腹になってしまった。

人々は朝から何時間も「消費の禁止」状態に耐え、禁止が解かれると一気に大量消費に突入して 200％ ぐらい食べてしまうのだ。この間に目の前に積み上げてある食物から何らかの形でつまみ食いでもしておけばこれほど食べ過ぎることはないのに、と思うが、幼い子どもでもそれは絶対に許されない。食べることが許されない（あるいは食べ物が無い）時は食べないで済ませられるのだ。だから解禁となると大量に詰め込む。まるで目の前にある大量の食べ物に攻撃されて挑戦するかのように貪り食っている。日常的には鶏肉をも骨の髄まで吸う人々が、この時は少し肉片が残っている鶏肉や豚肉を惜し気もなく捨てて次々に新しいものを食べたり、一つの包みを食べかけて別のつつみを開けて食べたりしている。ご馳走になる、というよりもお腹に詰め込むといったほうがいい。

大きな籠にたくさん持ち帰ったメレは「こんなにたくさん食べきれないから、豚の餌にするさ」と言っていた。食べきれないほど分捕ってきたのだ。

今日もまた、夕暮れ時には村の集落を囲むココヤシの林で風がサラサラと葉を鳴らしている。静かに、穏やかに一日が終わる。

（2）了